統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

T 02
N 69
41

日本における統計学の発展

第 41 巻

話し手　郡　菊之助

校閲者　松村一隆

統計数理研究所図書室

1977年6月11日（土）

愛知大学にて

10/12
26029

26029

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ま　え　が　き

1）この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合（A）によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*（代表者）、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三潴信邦*、森博美*、山元周行（* 推進係）

2）インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

3）この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

4）この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

5）速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以　上

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

私は、本年2月9日でもう満80になりました。幸いにして長命に恵まれ、人生の一区切りになったわけですし、金婚式も家内とともにすでに済ませました。しかし、不幸にして昨年の3月に、家内が胃潰瘍で名古屋の日赤病院に入院しまして、2カ月ほど療養しましたけれども、とうとう逝去しました。平素は芸能に大変打ち込んで、謡、仕舞い、小鼓までやっておりました。戦後は、私の勉強の手伝いをしなくてもいいんだけれども、戦前は何かと手伝いをしてくれまして、統計学の著書なども大抵家内が清書してくれまして、いつも家内には苦労をかけたわけです。

戦後、家内は栄養失調のようなこともありまして、片目を失いましたものですから、もう学問の方の手伝いは一切やらぬでもいい、名古屋は芸どころだから、芸が好きならそれをやりなさいといって、謡曲など、私は大分前に宝生流をやりましたものですから、やるんなら観世流をやりなさい、私には、そういう比較をするのが学問だ、宝生流と観世流はどう違うか、そういう比較もいたしたいからということで、家内には観世流をやらせることになった。

ところが、始めたら友達もずいぶんできましたし、名古屋は芸どころですから、ああいうものが安う習えるので、しまいには能楽殿などにも出まして、能のわき役などもいろいろとやり、そのほか仕舞いなんかもやり、それから小鼓も相当やりまして、免状も幾つかもらいました。

そういうことで、家内は後の方は私の手伝いなしに、

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

もっぱらそういう方面に打ち込んで人生を楽しく過ごしたわけですが、平素多少健康を省みなかったという点もございます。

私の家内は祖先が山梨県の出で、結婚50年のお祝いは昨年の4月に済みまして、80年が、私の生まれたのが2月ですから、それを楽しみにしておったところが、2月にかぜを引いたのがもとで寝込んでしまいました。たまたま長男が名大の経済学部第1回を出まして日本興業銀行に就職しまして、名古屋で勤務したり東京で働いたり、アメリカにも前に3年ほど行ったことがございます。今度また、英語が多少いけるものですから、一昨年の秋にカナダのトロントに支店のようなものを開くということで、うちの長男が責任者になって行きまして、いろいろ画策しておりました。その間に家族も呼び寄せるようになりました。そういう最中に母、すなわち私の家内が病気になったのです。

長男の女房は東京の品川区から迎えた。東京女子大を出ておりまして、英語が好きで、お父さんは第一銀行に勤めておったんで、友達関係で、銀行に勤めておる者でクリスチャンを夫にしたいという希望があったんですね。それが結ばれまして、結局、夫婦生活を始めましてもう20年以上ですから、娘が2人できまして、この2人の孫もカナダへ行くことになりましたので、学校関係が大変むずかしく、両親は苦労したようです。

そういうわけで、寒いときに長男の家族がお別れに名古屋へ参りましたが、私の妻はかぜの気があったのに、人の接待などで無理をしたせいか、結局寝込んでしまいました。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

2月中は、私、入院ということは余り感心しなかったものですから、自宅で蟄居しておりまして、できるだけめんどうを見てあげるということで一生懸命やったんですけれど、どうも経過が思わしくない。老人病の傾向もありましたから、3月4日に入院に踏み切りました。

私の次男は名大を3回生で出まして、三菱銀行に勤めていました。この次男は大阪に勤めたり東京におったり、アメリカではハワイとロサンゼルスに約6年もおりました。英語は相当いけるんです。この次男は幸いに近ごろ名古屋におりまして、池下の支店を預っておりました。相当成績もよく働いていました。その関係で日赤方面にも知り合いの人がおりまして、ぜひ入院ということをいわれたものですから、私も決心がつきまして、3月4日に家内を入院させました。

それからずっと病院任せで手当を受けたわけですが、もう相当病気が進んでおりまして、4月ごろ検査してもらいましたら、胃潰瘍が相当ひどくなっているということで、手術をすることはやめましたが、輸血や点滴などでその日を送っておったわけです。その間は本当につらかったです。病院通いもずいぶんしましたし、大体、どうなるかわからぬということで、どうも後から聞いた話で、やっぱりガンにも大分なっていたらしいんです。これは後で局部の解剖をしましてわかったことですが、胃ガンになっていたわけです。そういうわけで、胃潰瘍をこじらせたようなことで、とうとう5月10日に家内が亡くなってしまいました。

私の家内は山梨の英和校を出ておりまして、クリスチャンですが、私は洗礼を受けておりません。次男の嫁の

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

里が名古屋で、お寺関係に相当経験がありまして、いろいろ縁故がありますものですから、千種区の青柳町の法応寺というお寺にご厄介になりまして、諸事万端、その後の49日、あるいは100日の法要、ずっと済ませてまいりました。この間、4月にちょうど長男がカナダから支店長会議で帰ってまいりましたので、その機会に1周忌も繰り上げて済ませました。それでまた、5月10日の本当の命日にはお寺に行きまして、内輪で法要を済ませました。

そういうことで、1年の各法事は万事うまくいった。ちょうど昨日が13月目の命日なんですが、きのうはあいにく急用がありましたものですから、お寺へは参りませんでしたけれども、次男によろしくいうておいてくれということをお願いしました。そういうことで法事なども一応済みました。

私は5歳のとき父親を失い、12歳のとき母親を失い、実家は茨城県の下館（しもだて）というところで、いまは市になっておりますが、昔は小さい町でした。結城の少し東の下館が郷里なんです。幼少のときに両親を失いましたものですから、おじいさん、おばあさんの手で育てられたんで、本当なら自宅が商売で、木綿商でした。いまも、いとこが繊維関係の工場を持ってやっております。筑波山が裏の方から真っ正面に見えるところで、ちょうど三角定規を2つ並べたように男体と女体が真っ正面に見える、非常に風景のいいところです。五行川という川が流れておりまして、これはやがて利根川へ流れる川なんですが、そういうところで育ちました。

しかし、郷里にはどうも縁がなくて、尋常小学校が6

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

年、高等が2年という時代で、私は高等科1年までやりました。両親は早くなくなりましたから、家の後を継ぐというようなことも必要ない。まだ分家しておりませんでしたから。それで、中学校へでも入れということになりまして、県立の水戸中学の試験を受けたら通りましたものですから、それから水戸へ行きました。水戸といったって、昔の10里（いまの40キロ）も離れており、鉄道は水戸線ですが、家を離れて5年間寮生活をしたのです。それが第1次欧州大戦の前ですね。ずいぶん古い話なんです。そういうことで中学へは入ったんです。

私の家の意思は、私を将来学者にするとか、教育者にするとか、そういうことは全然考えてなかったらしい。まあ頭がいいから中学へでも入れておけば、中学出てから、当時軍人ばやりでしたから、軍人にでもなればいいんじゃないかというようなことだったらしいんで、中学出るときに早速軍の試験を受けさせられました。士官学校は、余り頑健でないので、体格で外れました。経理学校の方は体格は通ったんですけれども、学科で外れまして、とにかく軍人になりそこなっちゃったんです。自宅では私を軍人にするつもりだったんですが、残念ながらだめになってしまいました。

それから、私は自分の家が商売ですから、軍人にもなれないし、そうかといってどこかへ丁稚奉公（でっちはうこう、年期奉公のこと）に行くということも余り好みませんでした。私のそういう家族関係は、大体栃木県の宇都宮というところが商業が盛んでありますので、おじさん2人（母の弟）が宇都宮で呉服店に年期奉公しておりますし、私の弟も1人おりますけれども、同じく宇都

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

宮の呉服店に勤めております。

しかし、私は中学出ておりましたものですから、自分は進学したいという希望で、実家の賛成を得、一橋の高商と小樽高商を受けたわけです。ところが、一橋の方は勉強不足で外れてしまって、小樽が受かったのです。当時3年制の高商は少なかった。東京と神戸は、予科1年がついておりまして4年制ですが、小樽と長崎と山口は3年制のときです。東北方面には、ほかに高商はありませんでした。そこで、北海道へ行くことを決意しまして、単身津軽海峡を越えて寒い北海道へ行ったわけです。そして3年間寮生活をしました。(中学でも5年間寮生活でした。)そういうことで小樽高商に学んだのがやがて私が名古屋へ来る1つの因縁になったわけです。こんなことを話してますときりがありませんけれども、私の学問に関係がありますのでしばらく聞いていただきたいと思います。

小樽高商では初代校長は渡辺龍聖先生という方で、この方は早稲田の古い先輩の方なんですが、実業家の後援で早くアメリカに留学しまして、哲学科のドクターシップももらって帰国しております。日本へ帰りましてからは、東京音楽学校の校長も務めたということを聞いております。その後渡辺先生は、文部省の委嘱により小樽高商を創設して10年ほど校長をされました。それからやがて名古屋の高等商業。これは新しい3年制度。中橋文相時代の、新しい増設時代の計画なんですが、その筆頭に名古屋の高等商業がなって、いまの瑞穂区の桜山というところに創設されました。この仕事にもまた渡辺先生が大変尽くされまして、初代校長を10年ほど務められまし

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

た。そういう関係で、渡辺先生は80歳でお亡くなりになりましたけれども、文部省からは勲1等瑞宝章を贈られ、その上にアメリカで勉強した倫理学の研究が認められまして、文学博士号をいただいたわけです。専門学校でありますけれども、勲1等文学博士ということで、当時のわれわれ職員は自慢の校長を持っていたわけです。

先生は実業教育にも大層見識を持っておりまして、小樽高商と名古屋高商で独特の商業教育を行われました。商品実験であるとか、商工心理学であるとか、あるいは産業調査室なんてものもつくりまして、統計的研究を奨励されました。名古屋では、産業調査室の仕事が学者の間にも知られるような業績も残しております。そういう実証的な実学的な教育を施すことが1つの見識でございまして、そういうことでわれわれも協力を申し上げたわけです。

結局、私が一橋に入りましたのは、小樽を出て1年ほど東京で働いたわけですが、私の働いたところが、実はアメリカの会社であった。シンガーミシンの会社なんです。「シンガーソーイングマシンカンパニー」といって、当時は日本のミシン市場を独占しておりました。この会社の日本の総本店が横浜にありまして、大、中の各都会に支店がございました。東京は有楽町に支店がございまして、販売の拡張をやっておった。当時は裁縫機械というのはシンガーだけでありまして、日本の市場をほとんど独占しておりました。

そういう会社に、これも不思議な因縁がございまして入ることになりまして、そこで統計関係の仕事などをさせられたわけです。そのほか、英語が好きでしたから、

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

通信の翻訳などもやりました。ところが、統計の知識というものは専門学校時代に全然授業がなかったんです。統計専門の先生がおりませんでしたから。それで、会社に入ってからも計算のことでも非常にとまどったわけです。どうしてそういう統計の知識を専門学校で与えないんだろうという、不審の念を抱いたこともございました。その当時は地方の都市には専門の先生はおらなかったのであります。当時大学の先生としては京都の財部先生、東大の高野先生、一橋は少しおくれましたけれども、藤本先生が統計の授業を担当しておられました。そういう時代ですから、地方の都市には専門の先生というのはおらなかった。だから統計学の講義というのは全然受けなかった。会社へ入って大変困りまして、そこで統計の必要を大変感じたわけなんです。

そのうちに一橋が昇格しまして、最初の学制を廃止する。それまでは地方の高等商業を出たのは3年制度ですから、東京高商の4年制の高等商業へは本科の4年に編入され、語学の方で大分訓練されたようです。それからまた、一橋では上の方に2年のグラジュエートコースとして専攻部があった。そういうところへ入る者もあった。われわれの前の人は、推薦でも入れる。私どもの時代から試験制度が設けられまして、地方の高商は3年ですから、その人たちは予科3年を出た者に当たるんです。しかし、本科へただは入れてくれない。推薦でも入れない。簡単な試験がありまして、英文解釈、経済に関する英語の長い文章で、原書から引用したものが中心。そういうものでテストされるんです。私は大して準備もせずに試験を受けて通りましたものですから、それからまた田舎

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

の方へ相談しまして、当時東京商科大学と申しましたが、そこで3年間勉強することになった。アルバイトということは特に考えておりません。田舎の実家ではまだ祖父が存命しておりまして、うちは大学生なぞ要らぬよなんていって、一応反対されたんですけれども、入学試験受けて入っちゃったんだといって懇願いたしまして、本科の3年間の学資を出してもらいました。

一橋で何を専攻しようか。当時ゼミナールが必修でありましたので、最初の1年はこのゼミナールで外書を読む。ドイツ語でリーフマンの「ウンターネームングス・フォルメン」という小さい本がありますが、あれを、藤本先生について指導を受けました。それから、あとの2年は正式のゼミナールで、藤本先生に頼みまして、それまで統計学のゼミナールはなかったんですが、幸いにして数名の同志者があり、統計学専攻を希望しておられたものですから、藤本先生にお願いしまして、われわれのためにゼミナールを開いていただいたわけです。それが、私が学生時代に統計学を学んだ1つの由来で、必修科目にもなっていましたから、他の講義も聞いて試験を受けるということがあった。それとは別にゼミナールを藤本先生にお願いして、研究指導をしていただいたわけです。

そういうわけで、学生時代に何を勉強するかということは、私ら統計学全般についての知識はありませんでしたし、自分でも余り見当がつかなかったんです。しかし、そういうものを勉強していれば、時代が必ず要求するということは、会社の経験からしておぼろげながら感じておりました。とにかく藤本先生について指導していただけば、何かこれは物になるだろうというおぼろげな希望

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

でございました。

藤本先生という方は、学生時代、大変苦労されたらしいんですが、神戸高商の水島校長などのお宅にもおられたことがあるらしくて、神戸にも関係のある方です。一橋では保険論の講義がご専門でありました。しかし統計学の担当者がいませんでしたので、藤本先生がお持ちになった。それで藤本先生にお願いしまして、ゼミナールの学生としてご厄介になったわけです。

当時何を勉強するかということが大きな課題でありました。外国の書物などはほとんど知りませんでした。その当時福田徳三先生という経済学の先生がおられまして、あの方から経済学原論とか、あるいは経済政策論の講義を聞きました。福田先生は経済統計学にも興味を持っておられまして、論文にもそういうことを書いておられますし、それから社会政策の講義などにも、労働問題の重要なことをしばしばお説に出しておられました。

そこで私は卒業論文としましては、労働統計論というものを取り上げてみたんです。労働統計といっても範囲が広いですけれども、そういうものを体系的に考えて卒業論文にしたい。いろいろな方面があるようですが、賃金統計などが中心になったり、あるいは生計費の統計の問題、あるいはストライキの問題、いろいろあるようですけれども、私はそういう賃金統計などを中心にしまして、だんだんと研究の領域を広げていった。ただ、まとまった文献というのが余りないので、藤本先生のご指示によりまして、図書館に入っては、コンラードの「国家学辞典」(ドイツ語)の労働統計というところ、すなわちアルバイト・スタティスティックあるいはアルバイター

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

・スタティスティック、そういうようなところを訳しては報告していた。報告といっても学生の数が少ないですから、頻繁に回ってくるんです。ドイツ語は余り強くなかったんですけれども、一生懸命勉強したんです。

一橋における私の卒業論文は、要するに賃金統計を主体とする労働統計論でありました。勉強の間に知り得たことは、賃金統計には2種あること、すなわち賃金率(ローンザッツ Lohnsatz)の統計と賃金所得(ローンアインコムメン Lohneinkommen)の統計とがあること、前者は予定の賃金統計であり、後者は実際に収受された賃金統計であるというようなことが勉強の結果判明し、そういうことを論述しました。

話題が少し変わりますが、商品学という科目は、小樽高商では選択科目でございまして、商品実験室というのがこの学校にはあった。これは選択科目で、それを選ばない者は、外国貿易実践ということで、タイプライターのけいこをしたり、コレスポンデンス(通信文)を書いたりする、そういう選択によって商品学が学ばれました。

ところが、名古屋高商ではこれが必修になりまして、商品学も必修で、実験室、すなわちラボラトリーも相当りっぱなものができました。そこで、名古屋では商品関係の訓練を受けることになりました。これには、小原亀太郎先生——小樽では助教授でございましたが、名古屋には教授として赴任されまして、後に商品研究でもって京都大学から理学博士号を授かった。そういう人もおられました。名古屋には小樽系統が何人もおられましたけれども、私も学生時代の勉強が少し認められたのか、名古屋へ参ったわけでありまして、それまでは、名古屋には

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

親戚も何もない全く未知の土地でございましたが、恩師の関係でもって名古屋に向かうことになったのです。それが大正12年の春で、この年の秋には、ちょうど関東大震災のあった年です。この年の4月、ちょうど3年生が初めてできたときでありまして、創立3年目ですが、3年生に統計学を教えるということで、まだ十分講義の準備もしておりませんし、初めは本当に十分でない講義をしたことを思い出しております。

私は、学生時代からだと思いますが、丸善へ行きましても、洋書をチョクチョク見る習慣ができておりまして、ジジェークの統計学というものを、たまたま原書で見ました。それを一生懸命読んだわけなんです。後でわかったんですが、ジジェークはマイヤー教授の高弟で、りっぱな書物を残しております。それで、マイヤー先生の業績は、京都の財部先生の訳された「社会統計要綱」なんてりっぱな書物が残っています。財部先生の統計学は大体がドイツ系だと思われます。東京帝大の高野先生も奥さんがドイツ人でありますし、また、いろいろと勉強の方でもドイツ語を習っておられたりして、ドイツ系の統計学を学んでおられたようです。

そういうことで、ドイツの統計学というものがおよそどんなものかということは私にもわかりかけておった。たまたま丸善でジジェークの書物が手に入りましたものですから、それを一生懸命読み比べまして、何とかそれをものにしたいということでやっておりました。名古屋へ参りましてからも、そういうものを続けて勉強しまして、どうやら講義の輪郭もできたわけです。

これは私にとっても思い出の書物ですから、松村さん

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

にも、そういう時代のお話をさせてもらおうかということを申し上げました。その書物は持ってまいりましたものですから、お目にかけたいと思います。

これはマイヤー先生のスタティスティック・ウント・ゲゼルシャフツレー、すなわち「統計学と社会論」と題されてあります。マイヤー先生には人口統計論の書物もあるんですが、経済統計論の書物は、まとまったものは出なかったんじゃないかと思いますね。講義草案というものが、後で日本へ来たものを見たことがございますが、経済統計のまとまったものはなかったようです。道徳統計は大きなりっぱな書物があるんです。

ジジェーク教授の本は「グルンドリス・デア・スタチスチーク」という書物なんですが、これは原論と各論が1冊になっています。各論と申しましても多方面であり、私は各論を人口、経済、文化の3つに分けるんですけれども、文化の統計のうちには宗教の統計もあるし、道徳方面の統計もあり、犯罪、自殺の統計もあり、国民衛生の統計もある。いろいろ部門は多いんですけれども、とにかくジジェーク氏の書物は、そういった各論の部分を原論の書物と一緒にしておるんです。全部一緒にしている。半分とまではいかないけれども、5分の2ぐらいは原論、それから後の方が各論ということになります。この原論の方は、アルゲマイネ・スタティスティッシェ・メトデンテーレ、括弧しましてテオリー・ウント・テクニック・デア・スタティック、こうなっています。この中に統計学の歴史も入っておりますし、それから調査方面の方法論が非常に詳細に取り扱われております。

それから、方法論の中には、表をつくったり、図をつ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

くったりする問題がある。表をつくることについては、相当よい説明があります。図表の方は、実際の図表は入っておりませんが、言葉自体でもって図表の方法の説明をしています。その点はアメリカの統計学者などと非常に違うところでございます。あくまでも論理的に方法論を説いていくというところが特色ではないかという気がします。

各論の方は、「ツバイタータイル」(第2部)ということなんですが、余り本が大きいものですから、私は原論の方は解体して持ち歩いて訳したようなこともございました。各論の方は私も丁寧に目を通したんですが、これは訳本もその後出ましたが、原書では表題がちょっと変わっているんです。「マテーリエレー・スタティスティック・ウント・スペチエレ・メトデンテーレ」すなわち「実質的な統計学と特殊な方法論」ということになっています。

この実質的という意味は、やはり実体学と申しますが、英語のポジティブ・サイエンス、すなわち実際に数字を使って社会現象を解明するという、数字的な内容のある学問としての統計学、それを社会統計について考えておるんです。

マイヤー先生のお説がそうですね。先生も、統計学は方法論だというだけでは満足しないんです。実体的に人口、経済、文化、いろんな社会現象を多様なる方法でもって研究する。それは方法を述べるばかりでなく、実体の数字もそこに併用してそれを解説する。そういう意味の各論が要るということで、それを名づけて実質的な統計「マテーリエレー・スタティスティック」といっている

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

わけです。英語なら、「ポジティブ・サイエンス」という言葉が積極的科学という意味ですが、これに相当します。積極科学。ただ方法を説明するというだけじゃない、実体をも説明する。これも社会統計学であると考えるのです。

その実体を説明するということは、認識論的に統計学の領域ではどうかということは、非常な議論のあるところで、それが統計学認識論のむずかしいところです。

リューメリンとか、あるいはカウフマンという同じドイツの学者でも、そういう実体の学問としての統計学はあり得ない、人口、経済、文化、それぞれのための社会科学が別にあるのだから、何も統計学がそういうものまでをやらなくてもいいんだ、統計学はあくまでも方法論、方法の学問だというのが方法論派の見解なんですが、マイヤー先生の学派はそういう見解に反対です。それから、マイヤー先生の流れをくむジジェーク教授にしても、それからミューラー（Müller）という学者も、そういう実体学としての統計学を考えている。それから、チシツカという学者がいるんですが、このチシツカの書物でも実体学を考えまして、そういうものが社会科学として成り立つという意見で、結局マイヤー先生の衣鉢を継いだドイツ学者は少なくありません。

私は名古屋の高等商業に25年、終戦後までおったんです。図書館の館長などもやりました。毎月名古屋の丸善からいろんな書物を持ってきてくれるんですが、全部自分で買うのは大変ですから、図書館に入れてもらうものと、自分で買うものとえり分けまして、両方同じものは買わないという購入方法をとっておりました。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ジジェークの原本はありますけれども、これは名古屋（昔の高商、いまの名大経済学部）の図書館にはないかもしれません。それから、マイヤーの原本のうち、私の持っていないもので、「モーラル・スタティスティック」というのは厚い本です。これは名古屋大学の図書館にはあるはずで、いまも保存されて残っているでしょう。そういう図書の買い方をしたんです。一々両方買うということはできないから。

そういうことで私は名古屋大学には戻りませんでしたし、その後は訪ねることもないんですが、図書館は残っているわけですから、見たいと思えば、また頼んでということもあり得ますから、それで安心している。自分の著書などでも、出版のたびに3部くらいずつ購入してもらっていますからそこにおさまっているはずです。

そういうことで、文献的に私の手元に、人が持っていないようなものがいろいろあります。アメリカの文献などで珍しいものも持っています。

メイヨースミス氏の業績がありますね。重要なものは統計学と経済学を結びつけた業績、それから、統計学と社会学をえらく結びつけた業績があります。名前は、前者が「スタティスティックス・アンド・エコノミックス」後者が「スタティスティックス・アンド・ソシオロジー」という書物です。これは呉文聰さんが出しているんですね。「経済統計学」及び「社会統計学」という2つの訳本で巌松堂から出ているのがそれです。そういう古典の書物、アメリカの原版本も訳本も私は持っております。

その昔、中国からの留学生で京都大学に籍を置いた人が、名古屋高商を訪ねてきてくれたときに、私の研究室

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

を見て、メイヨー先生の名著があることに目をつけて、1冊譲ってほしいということだったんで、お譲りしました。その学生の人は天津大学から派遣された人でした。後で聞いたんですが、天津大学には有名な何廉という学者、洗礼名をフランクリン・ホーという統計学者がおりまして、この人はアメリカで、アービング・フィッシャー教授の指導を受けた人ですが、中国へ帰ってからいろいろな統計的計算をしている。物価指数の計算もありますが、珍しいのは、外国為替相場の平均指数を計算している。日本ではまだそういうものは出ない当時です。天津大学はりっぱな業績を残しているなと、感心したことがあります。

そういうことで、結局これは福田先生が仲介してくださいまして、天津大学と交渉が行われ、フランクリンさんとも若干交渉がございまして、こちらからお送りしたものがあり、あちらからもいろいろ出版物をいただきました。ちょっと話がそれましたけれども、そういうことで、重要な文献で図書館にはなかったけれども、私が持っているというものもあります。

それから、天津大学は周恩来さんが出身した学校だそうで、偉い政治家の母校ということで、私は昔、天津大学と若干の交渉を持てたということを、いま誇りに思っております。そういうことも私の研究歴として書き残しておきたいと思って、原稿をいま書いております。

そういうこともございまして、文献的には学校の図書館と自分の研究室と両方補ってうまくいくというような点もございました。そういう点は、よかったか悪かったか、とにかく予算も限りがありますし、自分の個人的な

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

予算も考えなければなりませんから、そういうような研究や講義の仕方をしたこともございます。

ジジェークの書物は、学校に頼らず自分で購入しました。そして、その原論の部分を、熱心に訳しまして、大正14年に「統計学講義」という書物を同文館から出しましたときには、ジジェーク教授の影響を大いに受けているわけです。ただ単なる翻訳ではなしにいろいろ追加したところもございますので、著書の形にはなっております。

各論の部分は竹田武男という人が訳されまして、有斐閣から「応用統計学」という厚い苦心の書物が1冊出ております。それを持ってこようかと思ったんですが、ちょっと重くなるものですから家へ置いてきましたが、竹田さんの訳は、ジジェーク教授と親しく文通をしまして、その許可を得て、写真まで巻頭に掲げて訳しております。

どうも竹田さんという人は京都に住まっておられた方のようでございまして、その訳本を出すについては著者とよく交渉もし、また改版が出ておるもので、改版がその後送られたりしたので、せっかく訳した初めの訳をまた書き直したりして、大変苦労されたようですね。それで、その訳本を出版するに当たっては、汐見先生とか、あるいは東京大学の先輩の人々のいろいろな援助、奨励を受けて出したというようなことも書いてございます。

そういうことで、各論の訳の方が先に出たわけです。ところが、原論の方がまだ訳本というのが出てないようでございまして、そういうところを私が、幸か不幸か一生懸命勉強して受け継いでおりますので、これは私の仕事となりました。いうならばジジェークの統計学はマイ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ヤー先生のそれとは大分違う説き方があるようです。それで私は、ジジェーク教授の文章の方が文としてもわかりやすいし、論理的にも大変納得いくことが多いようでありまして、それに満足したのでありました。

たとえば「法則論」なんというのも、マイヤー先生は「法則」という言葉を使う。そして、これにいろいろな種類があるといい、この解説をされておるんですが、ジジェーク氏は「法則」というはっきりした言葉を使わないんです。そのかわりに「ゲゼスメーシヒカイト」というんです。これを訳して「合法則性」などという人があります。私は「合」という字は要らぬ、「法則性」というだけでよい、「メーシヒカイト」ということは「性」という字であらわされている、「合」は要らぬということで、私の書物では「法則性」という言葉を使っておる。もとの言葉は「ゲゼスメーシヒカイト」です。

これは結局、２つの数列が互いに相関する場合、たとえば、物価が騰貴すれば犯罪数がふえるとか、あるいは交通事故と国民経済の発展がどういうふうに関係するか、あるいは自然現象ですと、気象の変化と経済成長の伸び率の変化、２つの数列の間の相互関係。統計学的にいえば相関関係ということになるんですが、コリレーション、そういう場合を「ゲゼスメーシヒカイト」というんです。

ただし、どちらが原因でどちらが結果かということは、にわかに判断が許されない。相関関係必ずしも因果関係でないというのがジジェーク教授のはっきりした言い方です。しかし、相関関係は、因果関係を究明する１つの手がかりにはなる。そういう意味で重要である。あるいは終局的な因果の関係というものは、統計学だけでは決

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

定しがたいものである、そういうこともいっております。そういうことから、他の社会科学の教育や知識も必要であるということにもなるわけです。そういうことをまとめておりましたので、「ゲゼスメーシヒカイト」という言葉が、私には大分親しみ深い術語になってしまいました。

また、そういう考え方の日本における1つの実践的な実例としまして、通貨の発行高と物価の変化がどう関係するか、通貨が膨張すれば物価が上がるというのは定説なんです。フィッシャー教授の学説もそういうところにあると思います。そういうことの検証を実際にやった例が日本にもあるのです。

それは皆さんご存じの飯島幡司という人、元神戸高商の先生で、後に朝日新聞に入りまして、金融経済論の研究で学位を得ておられまして、経済学博士になっておられる人ですが、飯島さんが日本の資料を使いまして、主に明治、大正時代の資料だったと思いますが、そういうテストをした。飯島さんのテストでは、通貨の膨張が物価騰貴の原因だという結論。資料をいろいろ整理しまして、それを図表にあらわして断言しています。飯島さんの結論はそういうことです。

ところが、同じ日本の材料を使った研究には、先ほど申しました京都の汐見三郎さんの研究があります。これは一度機関誌に発表されたもので、後に論文集「経済統計研究」にも載っております。汐見さんの研究では、これも図解されているんですが、通貨の曲線と物価の曲線は確かに相伴って動くという傾向が強い。しかし、汐見さんの場合は図表が違うんです。飯島さんの場合はいわゆる「差図表」なんです。すなわち縦目盛りが等差的な

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

図表です。ところが、汐見さんの場合は幾何図表を使っているんです。すなわち比図ですね。目盛りの上と下が比率的になっている、そういう図表を使っている。

そしてそれを検討した結果、両者は互いに相対応して動いておるけれども、どちらかというと物価の方が早く動く傾向がある。そういうところに着眼しまして、汐見さんの説明では、物価騰貴の方が原因であって、通貨の膨張が結果であるという結論を下されておるんです。これは不思議なことだ。同じ日本の資料を使いながら、両方の学者の結論が違うということはどうも納得いかないということで、私はいろいろ考えたんですが、1つは図表の種類が違うということもあると思います。差図表と比図表というのは性格が違うんです。差図表というのは零線からの距離が問題なんです。上の方へ行ってたって、零線からの距離が遠いか近いかによって意味が違うんです。比図表は比率そのものの問題ですから、零線は問題じゃない。曲線そのものを直接比較することができる。だから、図表の種類によって曲線の解釈の仕方も違うのです。そういうことをお2人とも余り知らされなかった。だから、私が、「物価指数論」においてはそういうことにくちばしを入れまして、同書の付録において若干自分の意見を述べたこともございます。

そういうふうに、どちらが原因か、どちらが結果かというように結論を急ぐから危ないことになる。相関関係は平等である。数学的にいえば、それはまたアロケーションを計算するということもあるでしょう。そういう計算の課題もあるわけです。それをすぐ結論を急ぐというところに危険がある。そういう点は反省すべきものじゃ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ないかということを、私の論文に載せておきました。これを見てくだすったのか、後で飯島さんと汐見さん、大変親しくなったということを聞きました。私の論文がもとになったのかどうかわかりませんが……。

私自身は、ああいう実証的研究を余り多くはやってない。そこまでいきませんのですが、人口方面のことは種々調べております。国勢調査の結果などいろいろ分析しております。あとは、経済統計の方面もいろいろ手がけはしたんです。学生時代に労働統計の方をやったことがあります。その前に、小樽高商の卒業論文では貿易統計論をやりました。国際経済について、大西猪之介という「囚われた経済学」という著書のある先生が指導してくださいまして、それで貿易と国際収支の関係などを勉強した。そういうものを卒論に書いたことがあります。

長い間のことで、物価の問題、景気の問題、どちらも指数に関係があり、「物価指数論」や「景気指数論」という書物も出していますけれども、そういうふうに私は経済統計を中心にして進もうという気持ちがあった。いまでもそういう心境を持っていますが、これは自分1人ではやり切れない点もございます。そういうところに協力者を望む次第であります。

私は、いろいろと文化統計の方面にも手をつけたいと考えております。ジジェークの言葉をかりればポジティブサイエンスとして、あるいはマテリエルビッセンシャフトとしての人口、経済、文化、これらの各論的研究にもなるべく体系を残していきたいという望みを持っておる。果たしてそれがどこまで実現し得るかは未知数でありますけれども、老後許される限り、ひとつ努力してい

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

26029

きたいと思っています。

また、そういう研究があり得るということ、実体学としての統計学各論というものがあり得るということ。それを他の学問が、オレの領域だといって持っていってしまうことはけしからぬじゃないか。マイヤー先生の言葉をかりていえば、これは認識論的なる強力さだ――エアケントニステオレティッシェ・ゲバルトアクト(Erkenntnistheoretische Gewaltakt)である。そこまで強くいわなくてもいいかもしれませんが、そんな感じを持ちます。

それから、統計の学問を勉強している人は、統計の方法を知っているわけです。素人が数字を扱うよりは、それだけ間違いが少ないわけです。大体、統計学者でなくても、統計学を勉強した人が数字を扱う方が、危なっかしいことがない。実際に世の中がどういうふうに進んでいるかを見ますと、実体的な研究がだんだん1つの体系を持ち、内容を豊富にしつつあるんじゃないかということを思いますね。

ドイツのワーゲマンの研究所なんか、そういうものは皆数字を使って、図表を応用している。あれはやはり実体的な研究じゃないか。それが本当の学問になっているかどうかということは問題ですけれども。実際の数字を使って、実体的に知識をまとめていくという傾向を時代が要求しておる。日本で何々白書というもの、官庁統計方面の人々の努力、ああいうものもそういう例であると思いますし、第一生命保険の社長の矢野さんの始めた「日本国勢図会」、ああいうものも毎年刊行されていて、実体的研究の貴重な例であると思います。

かようにいろいろな人々がたくさんの文献から資料を

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

集めて、できるだけ図表を掲げて内容を説明しております。そういう人々は必ずしも経済学者や統計学者ばかりじゃないですから、数字の使い方にも間違いがあるのはあるようでありますし、図表のかき方についても、原理的に申しますればどうかと思うようなかき方のものもありますけれども、そういうものが相次いで出るということはよい傾向です。また、学者の目から見た実証的な研究もいろんなものが出ておるようです。2～3日前、丸善へ行きましたら、有沢さんがまとめたもので「昭和経済史」なんという大きな書物が出ています。ああいうのは、統計学者が関心を持って当たっていますし、それぞれ統計学的に熱意のある人の作品ですから、りっぱな研究じゃないかと思います。そういうものをよく読んで、後日感想を述べさせてもらいたいと思います。そういう実証的研究もいろいろ出てますから、そういうものはやはり尊重しなければならない。ただし、それが果たして独立の科学としての成果であるかどうかということは問題があるでしょう。

蜷川さんがいうように――蜷川さんと論争したことがあるんですが――蜷川さんは、統計学は方法論である、その方法論というのは調査論と分析論だというご意見です。実体学というものは無理に認める必要はないとおっしゃる。それはそれで私はいいと思うのですが、私はそれでひきさがらないで、自分の見解を通しております。

そういうことで、統計学のいきさつをいろいろおしゃべりさせていただきましたけれども、余り長くなりますとご迷惑をかけますので、一応これくらいにして、皆さんのお話もまたいろいろ聞かしていただきたい。私の話

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

を種にしまして、また皆さんからも、近ごろの統計学界の傾向や動向、あるいは統計の授業の上でお気づきになったようなことをお聞かせください。私もまだ現職で愛知大学で統計学を教えておるんですから、いろいろ授業の参考にも利用したいと思うんです。

大分おしゃべりをしてしまいまして失礼しました。私は、まとまりのないことをしゃべるくせがありますのでごめんください。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

上記の講話に対して、補足として若干のことを書き添えます。(昭和57年10月)

1、一橋の大学時代に、私とともに藤本先生に統計学の指導をお願いした同志には、柴田銀次郎君や伊達宗雄君がいました。柴田君は後に神戸大学の教授となり、統計学の研究で経済学博士になられています。伊達君は国際連盟の東京支部に入り、種々統計上に活動されました。

2、数年後に、藤本ゼミに入られて統計学を専攻された人々の中には森田優三君がおり、卒業後に横浜の高商教授となり、大戦後には中央の統計局長に栄進され活動されました。

3、日本の統計学界の初期の学者には、そのほかに、早稲田大学の小林新教授や関西学院の田村市郎教授、また統計局の森数樹氏などがおられ、それぞれ有意義な研究を発表されています。また、統計方法論では理学博士小倉金之助氏の「統計的研究法」という名著もあります。こういう業績について一々述べることはただいまは省略します。

4、私経済的意味の統計学、いわば経営統計的研究には、拙著に「経営統計」(東京・叢文閣発行)や「工場経営統計」(千倉書房)など苦心の業績がありますが、これも一々述べることを略します。

5. 数理統計学の進歩も日本の学界の著しい特色で、世界に誇るべきものが多いと思います。日本統計学会は、社会統計学者と数理統計学者の大同団結で、数百名に及ぶ会員を有し、毎年各大学の持ち回りで全国大会を開催しています。

(統計研究所)